

わんちゃん、ねこちゃんの健康について、獣医さんから専門的にお話しいたします！

# わんにゃの健康最前線

「心臓病～9歳では58%、13歳では90%以上?～」



京都中央動物病院  
院長 獣医師  
村田 裕史 先生

ついにゴールデンウィークです。わんちゃんと一緒に過ごす時間がたくさん取れる非常に嬉しい時間となったのではないのでしょうか？いつもより長く一緒にいると日頃忙しい時に気がつかない微妙な変化に気がつくことができます。咳や呼吸が苦しそうなときはありませんか？これはもしかすると「僧帽弁閉鎖不全症」かもしれません。

## はじめに

この僧帽弁閉鎖不全症とは、心臓の病気で、今回のタイトルにある数値の「9歳では58%以上、13歳では90%以上」とは、病気の重症度は軽度から重度まで様々ですが、このように多くのわんちゃんに併発が確認されたとの報告が存在しております。この統計はかなりの衝撃的な内容だと思えますが、実際の臨床現場でも多くの小型犬にこの病気を認めます。その中でもキャバリアキングチャールズスパンエルとマルチーズは本当に圧倒的な確率でこの病気を罹患し、実際、90%以上であると感じます。これらの犬種を飼われている飼い主さんはこの点を覚えておいてください。そして、チワワ、ポメラニアン、シーズー、トイプードルなどの小型犬にも多く発生します。

この僧帽弁閉鎖不全症は心臓の僧帽弁の病気で、僧帽弁とは左側の心臓の部屋である左心房と左心室の間に存在し、血液が逆流しないように機能しております。この僧帽弁が変性し、肥厚してくる粘液腫様変性を生じることにより、僧帽弁の閉鎖が不十分になり、血液の逆流が生じるようになります。これが進行し、逆流の量が増えてくると心臓の拡大やうっ血による肺水腫など様々な問題が生じてきます。

この僧帽弁閉鎖不全症の症状はどのようなものがあるのでしょうか？実は今回、この5月号でこの病気を取り上げた理由がそこにあります。臨床現場で働いているこの病気の悪化は暑くなる時期に悪化する傾向が多いと感じるためです。暑い時期と聞くと、真夏の7～8月頃を想像するかもしれませんが、実は、初夏頃から5月後半から6月頃くらいに急に温度が上昇し、夏目となるような時期に急に悪化してくるパターンが一番多いパターンです。恐らく、まだ体が暑さに順応していない、あるいは、室内でエアコンを入れていないなど様々な背景があると想像しております。では具体的な症状とはどのようなものなのでしょうか？咳、呼吸が

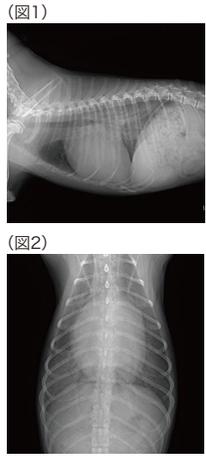
## 診断

診断はわんちゃんが咳をしたり呼吸が苦しそうな病気の中から、この僧帽弁閉鎖不全症を見つけていきます。また、少し注意が必要な点として、症状がない無症状のわんちゃんにもかなりの数のこの病気が存在していることもあるということです。当然ですが、症状があるわんちゃんに対しては、適切な治療が必要です。しかし、この無症状のわんちゃんも適切に診断し、心臓の拡大などの問題がある場合、病気の進行を緩徐にするために治療介入をすることが大切なのです。この無症状のわんちゃんを適切に診断し、治療介入するかどうかの決定はやや難しい内容となるため、今回は症状があるわんちゃんへの診断プロセスについて述べたいと思います。

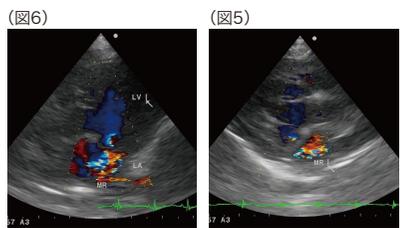
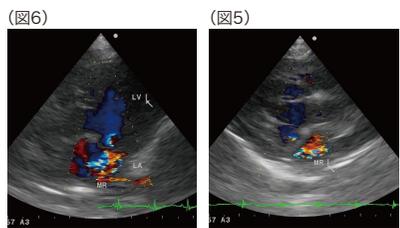
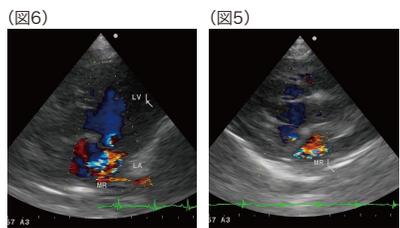
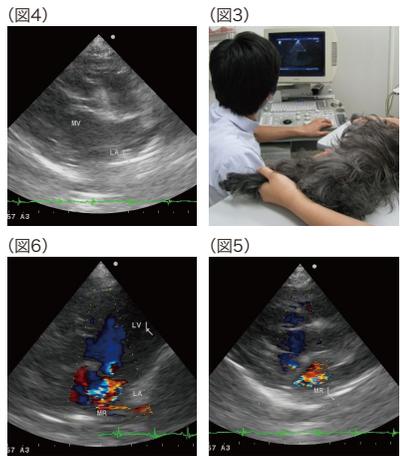
最初に、咳や呼吸が苦しそうなわんちゃんが診察に来たら、いつからその症状があるか？などの一般的な問診や身体検査を実施します。このステップでこの病気を一気にとりあげることができるものがあります。それは聴診です。もちろん、先ほど述べたような無症状のわんちゃんも僧帽弁閉鎖不全症では血液逆流が少ないため、聴診器で判断できないものも含まれる可能性があります。しかし、咳や呼吸困難などの症状がある場合、この僧帽弁閉鎖不全症がある程度進行しているため、聴診器で左側の胸を聴診すると、心雑音を聴診できます。この心雑音を文章で書くことは難しいのですが、通常的心声音が「ドックン」と1音と2音に分かれるのですが、その1音と2音の間に血液が逆流する音が入ってきます。通常の心音になりません。さらに、人間でも、心臓の拍動を手で感じることもできると思いますが、わんちゃんも同様に胸に手をあてると拍動を感じることがあります。この拍動も僧帽弁閉鎖不全症が進行すると、スリルと言われる独特なものに変化します。これを文章で書くことはなかなか

難しいですが、普段からわんちゃんの胸に手を当てて感覚をつかむと役立つこともあるかもしれません。

この身体検査が終了すると、X線検査、血液検査、心臓超音波検査を実施していきます。X線検査(図1と図2)は、僧帽弁閉鎖不全症により拡大した心臓を確認したり、この疾患の重大な合併症である肺水腫を確認したりする非常に大切な検査となります。また、小型犬は僧帽弁閉鎖不全症だけでなく気管虚脱や気管支虚脱もよく発生するため、咳の原因を確認するために重要な検査となります。一般的な血液検査はこの疾患により異常値が生じることは基本的にはないのですが、治療のために利尿剤を使用することが多い点や高齢犬の場合には、腎臓病を併発する可能性が高いなど、やはり血液検査を実施しないでの病気をコントロールしようとするのはかなり無謀な試みと言えます。また、先ほど、一般的な血液検査と書きましたが、最近では特殊な心臓病マーカーも利用可能となっており、BNPやANPと言われているものは、この僧帽弁閉鎖不全症で上昇して観察されます。



しかし、やはり僧帽弁閉鎖不全症の診断のためになくてはならない診断ツールは、心臓超音波検査(図3)です。この診断ツールを用いると、変性し肥厚している僧帽弁(図4)や、心臓内の逆流している血液を画像(図5)と図(6)として捉えることが可能となります。この検査により僧帽弁閉鎖不全症と確認するだけでなく、先ほど少し述べた僧帽弁閉鎖不全症に罹患しているが無症状のわんちゃんに対する治療の必



要性の有無、あるいは治療への反応など実に様々な情報を得ることが出来る検査です。その他、この僧帽弁閉鎖不全症の診断で利用する検査としては、心電図検査や血圧測定なども実施する場合があります。これらの検査については今回の記事では割愛させていただきます。

この診断プロセスで注意が必要な点としては、僧帽弁閉鎖不全症はゆっくりと診断をすることができない場面もかなり多く存在するということです。呼吸が苦しうようになってくるわんちゃんはかなりこの病気が進行しており、肺水腫などを発症し非常に危険な状況になっていることも珍しくありません。このような状況の時にいつものように診断を進めると呼吸困難からわんちゃんが亡くなってしまふ可能性すらあります。従って、そのような緊急事態では先ほど述べたような診断のプロセスに固執することなく、緊急治療にすぐに取りかかり安定化を優先するようにします。

## 治療

実はこの僧帽弁閉鎖不全症の治療には日本だけでなく海外でも多くの先生が採用しているガイドラインが存在しております。当院でもこのガイドラインを

## 予後

この僧帽弁閉鎖不全症は慢性進行性の疾患であり、残念ながら治る病気ではありません。しかし、かなり多くのわんちゃんが投薬などの内科治療により病気のコントロールを長期達成することがあります。また、まだまだ非常に特殊な治療ではありますが、僧帽弁閉鎖不全症には内科治療だけでなく、外科手術も実施されるようになってきました。今後もしかすると新しい治療選択肢が増え、この疾患があるわんちゃんであってもより長期にコントロールが可能となってくることも期待できます。

## 終わりに

これからだんだん暑くなっていく時期に、わんちゃんが咳をしていたり、呼吸が苦しうな時には、9歳では58%、13歳では90%以上存在すると報告されるこの僧帽弁閉鎖不全症はやはりチェックするべきでしょう。また、この僧帽弁閉鎖不全症はある程度進行するまで症状が出ません。咳などの症状がなくても多くのわんちゃんにこの僧帽弁閉鎖不全症が存在しているのが現実です。夏が来る前に心臓の検診も検討ください。

〈お問い合わせ〉

京都中央動物病院

電話

075-821-1020

京都市下京区柿本町582-3

9:00～20:00